加藤道雄少将（元陸軍予科士官学校生徒隊長）の思い出

伊佐　二久　陸士55

数年前、鹿児島県霧島市で医院設営しておられる原口要先生からお手紙と加藤道雄少将が終戦後5年間のシベリア抑留中に作られた漢詩とお写真を送っていただいた。

加藤少将は明治33年生まれ、熊幼、陸士（33期）、陸大（43期）を経て多くの要職を勤められ、戦時中陸軍予科士官学校の生徒隊長を勤められた。

私も32中隊の区隊長を勤めたのでご挨拶したことを記憶している。

その後、第30軍参謀長で満洲におられたため、終戦後ソビエトに5年間抑留され、大変なご苦労を経験された方である。

その方が厳しいシベリアの抑留生活中にも拘わらず、陸士60期、61期生のために立派な長文の漢詩を作られ、その温情に感激したものである。

表題は「贈　第六十期六十一期生諸君」とあり、漢詩は「振武台回顧賦」と題されている。

漢詩とお写真、履歴は添付させていただいた。昔の写真で不明瞭であるがご了承いただきたい。

昭和25年帰国されて京都に住まわれ各方面で活躍された。

著書も出版されたが昭和56年81歳で逝去された。

以上、逆境のシベリア抑留中にも拘わらず、昔の生徒たちのために漢詩を贈られた温情に感激して原口先生のお許しを得てご紹介することにした。

自衛隊の皆さんも、シベリア抑留中にも拘わらず、このような方がおられたと読んで頂ければ幸甚に存じます。

原口要先生には貴重な資料を提供して頂き感謝申し上げます。

明治三十三年（一九〇〇）八月二十九日生、旅団長野馬。父の志を継ぎ十四歳で熊幼に入校（18期）、陸士（33期）、陸大（43期）卒。

陸軍戸山学校教育班教官、歩三〇中隊長（満洲事変参加）、参謀本部第二部（第二課）、陸大兵学教官（兵站）、関東軍参謀、満軍大臣秘書官、第十三軍作戦主任（上海）、関東軍参謀（関特演）、陸士教官（戦術科長）、第八方面軍第二課長（ラバウル）、参謀本部付（療病のため入院）、陸士教官兼、教育総監部第一課長、陸士予科生徒隊長等を経て、終戦時は第三十軍参謀長（満洲）、少将、四十四歳。

ソ連邦により五年間シベリア（哈府収容所）に抑留され昭和二十五年帰国。直ちに日本旅行会（後の日本旅行）に入社、取締役、総務部長、甲賀研修所長等を経て四十八年退任、引続き同社常勤嘱託（中央研修所講師担当）として現在に至る。八十歳。

趣味　囲碁、漢詩、俳句（号は三千翁）

著書　春一日旅六十年史（昭和四十五年十二月発行）

思い出（昭和五十年十二月発行）

本籍地　京都市右京区嵯峨野宝筐院町

現住所　京都市右京区嵯峨野宝筐院町

奈瀬町三十二番地の二

郵便（〒615）八六一一六五九番

加藤道雄

贈　第六十期　六十一期生諸君

振武台回顧賦

武蔵原野聖地在　翁然未茅数千児
雄健剛為国楨称　紅顔壮志忠俊才
訓育錬錬培将器　純忠翼作皇扶翼
修文養正大膺徴　切磋偲偲奮武徳
信念不動七生誓　練武克敵増気力
聖上臨幸業永存　一誠進奉五陵勅
八紘一宇我国是　王子伍長衛邸影
起皆簡素奄意仕　純真剛健生枝風
日祝教拝靖国神　宮勤務剛正無雙
金剛剣水果楠風　旭天遥望富士峯
吟詠顔王御楯歌　鶴城孤丘思白虎
義得剛毅処膺念　高唱吉野万朱諸
同窓先進奮空陸　意気烈烈童乾坤
伝聞武勲所抱負　能登稿華報君恩
岩料一朝図南空　仰瞻遺烈御接跡
慶学園校友回歌　慟哭餞送解武軒
嗟乎健児今何在　病服悪疫復何言
朝終莫舎振武魂

昭和二十五年歳暮　抑留中作

元陸軍予科士官学校生徒隊長
加藤道雄